

## 第21号

2025年  
3月発行

## CONTENTS

知の網の目へ

国文学研究資料館長

渡部 泰明

①～②

基幹事業センターについて

国文学研究資料館 基幹事業センター長

入口 敦志

③

古典籍データ駆動研究センターにおける国文研DDHプロジェクトへの取組

国文学研究資料館  
古典籍データ駆動研究センター長

大山 敬三

④

こんな古典籍があった！

—国書データベース典籍画像紹介—  
第一回

⑤

国文研DDHプロジェクト  
キックオフシンポジウム見聞録  
神戸大学大学院人文学研究科准教授

有澤 知世

⑥～⑦

トピックス

⑧

## ふみ

「データ駆動による課題解決型  
人文学の創成」データ基盤  
の構築・活用による次世代型  
人文学研究の開拓」  
(国文研DDHプロジェクト)  
ニューズレター大学共同利用機関法人人間文化研究機構  
国文学研究資料館

## 知の網の目へ

大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的  
典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」  
(二〇一四～二〇二三年度)では、三〇万点の歴史的  
典籍の画像データを作成し、国書データベース上で  
ウェブ公開した。後継計画である「データ駆動による  
課題解決型人文学の創成」データ基盤の構築・活用  
による次世代型人文学研究の開拓」(二〇二四～  
二〇三三年度)では、そのデータをどう拡充し高度化  
するか、どのように活用するかが大きな課題となる。そのためには、日本文学関連領域の専門家はもち  
ろん、文理を問わず異なる専門分野の研究者や、市  
民、子供たちが、思いのままに使えるようにしたいと  
思っている。自分で問いを立てて自分で答えを探し  
出す発見的な学び——それが課題解決型人文学と称

国文学研究資料館長

渡部 泰明

した所以である——を可能にする情報環境を整える  
ことを目指している。この学びは、個人個人の関心や  
能力に即して行われる。つまり多様性を多様なまま  
に認め生かしていくことになる。さまざまな問い自  
体を生み出し、問いに答える発見のためのデータを  
用意することが、データ駆動への道筋と考えている。二〇二五年一月二十二日、福島県双葉郡大熊町と  
の間で、学術交流・協力に関する基本協定を締結し  
た。調印式は、同日大熊町役場において行われ、吉田  
淳町長とともに署名を交わした。これまで、当館西村  
慎太郎教授が大車輪の活躍で大熊町との連携を進め  
てきた。これからも中心になって推進してくれるこ  
とを期待している。

大熊町とは、いうまでもなく福島第一原子力発電

所の存在した町である。今も廃炉作業は続いている。報道等によっておおまかに状況は知ったような気になっていたが、実際に現地で見ると目には驚かすような印象は異なっていた。いまだ六割の地域には立ち入りに制限が設けられている。放射能汚染によって、家屋は解体除染された。残されたブロック塀の一部などから、解体された数多くの建物の跡がうかがえる。これが人為によってもたらされた事態なのだと思うとき、文明がたどりついた先にあった負の力に思い至らざるをえない。私たちはいったい何をしてきたのか、そして何ができるだろうか。

かといって負の面だけではない。希望をもまた感じた。見学させていただいた「大熊町 学び舎 ゆめの森」は、その一例である。○歳から十五歳までの学びの場となっているその空間は、図書館と乳幼児から中学生までの、公教育としての学びの場となっている。学年の区切りなく、少人数で、自主性をもって学べるように、円型、螺旋形を構造の基本として作られた空間で、いわゆるラーニング・コモンズである。学校が存立しえなかった時期をもち、いまま学齢者の数が限られている状況を、むしろ生かした画期的な試みだろう。従来型の教育制度から未来型のそれへと、全国的にも注目される教育だ。この教育の場に参加しようと移住してくる方々も増えているという。

私たちが情報を集め公開している歴史的典籍は、日本文化の基層を形成している。私たちのアイデンティティに関わるものである。基層といっても、どこか遠くにある、抽象的なものではない。認識や判断や行動の基盤になっている、アクチュアルな知である。

私たちが物事を認識しようとするとき、そこには認識の枠組みが存在する。さまざまな知識・情報が集積され、相互に結びつき、網

の目のようになっていく。この知識・情報が構成する網の目をもとに、私たちは世界を捉えることができるようになる。

その網の目は常に可動的である。でなければ、今までの枠組みにすっぱりと収まらないこと以外は受け入れることが出来なくなる。新しい局面に遭遇したとき、ときにその網の目は更新を迫られる。更新されるような体験を発見と呼ぶ。私たちの認識は深まり、強度を増す。そして自分と異なる他者への視野を開く。

学びは、勉強、教育、研究と区別する必要がない。いずれも、発見という主体的な行為が中心にあるからだ。私たちは、将来の世代も含めた人々のために、ただそれだけのような主体的な学びの環境を作り上げられるかが、問われている。というより、自分たちの腕の見せ所なのだ。

現代の社会的課題のほとんどは、地域の状況に集約されている。一極集中や経済格差も、少子高齢化も、女性の社会進出も、とりわけ地域社会が直面する問題である。私たちが扱う、地域の文獻・史料にしても、従来は、地方から都市へと一方通行的に情報を集めることが多かった。情報の一極集中である。

しかしデジタル化が進めば、地域からの発信、地域同士の交流を推進することができるだろう。地に根差す対面性の良さを生かしつつ、空間を越えた人間関係ネットワークを作りうるだろう。それは、マクロな形での、「知の網の目」である。心と社会の双方に広がる「知の網の目」の形成に関与したいと願っている。



# 基幹事業センターについて

国文学研究資料館 基幹事業センター長 入口 敦志

国文学研究資料館は、国文学とその関連分野の資料につき、その所在の情報を調査して集約した上で、情報を整理し、その情報を研究者に向けて発信することを基幹の業務としている。ここで扱う研究資料は、古典籍や古文書の現物からデジタル画像やテキストにいたるまで、多岐にわたっている。また、調査の対象も、国内外の公的機関から寺社、個人におよぶなど、それぞれの個別の事情に対応する必要もあり、丁寧な対応が求められている。

基幹事業センターは、その基幹事業を推進するために設置された。さらにそのもとに、学術資料部、国際連携部、社会連携部の三つの部を置き、多岐にわたる役割を分担して行う体制になっている。従来、「調査収集」として、資料の調査と撮影による画像の収集とを一貫して行っていた事業を、後者については、歴史的典籍NWS事業（二〇一四～二〇二三年度）での画像作成と合わせて、基盤データセンターに一本化した。

国文研DDHプロジェクトに関して、学術資料部の最も大きな役割は、国書データベースの運営である。国書データベースの安定的な運用のためのサーバやシステムの管理、および情報の整理と発信を行い、まさに国文研の事業の基幹を担っている。現在の古典籍の所在情報や画像に加え、国文研DDHプロジェクトで構築する予定の大規模なテキストデータの発信についても、その方法などについて検討をすすめている。

さらに国際連携部では、次世代育成と国際ネットワークの充実を図るための企画、学術交流協定の締結、ジャーナル・ディレクト

リ運営などによって安定的かつ継続的な研究交流の実現に努めている。

研究者コミュニティのみならず、市民および地域社会や初等教育界との連携も重視されており、情報発信やイベントの開催などの社会連携部の活動も重要性が増してきた。

三つの部はそれぞれ分担しながら事業を行っているが、相互に連携をはかりながら、意義ある事業とすべく活動している。



図1 国書データベース



図2 「古典の日」講演会(2024年11月2日(土))

# 古典籍データ駆動研究センターにおける国文研DDHプロジェクトへの取組

国文学研究資料館 古典籍データ駆動研究センター長 大山 敬三

古典籍データ駆動研究センター(以下、「センター」)は二〇二二年四月に新たに設置されたデータ駆動型の人文科学研究を推進するセンターであり、「データ駆動による課題解決型人文学の創成(国文研DDHプロジェクト)」(以下、「プロジェクト」)に先駆けて研究開発を行ってきたが、二〇二四年度にプロジェクトが開始し、センターが主としてその研究開発活動を担うこととなった。本稿では、とりわけプロジェクトの推進に欠かせない異分野との連携・融合に関わる活動の一端をご紹介します。

センターでは、プロジェクトに関連するテーマを対象としたプロジェクト型共同研究を所掌している。二〇二四年度は三つのカテゴリを設定し、計三十一件の研究を実施している。例えば、「萌芽研究」として「AI技術を用いた大規模古典籍画像に対する新たな検索手法の研究」(図1)、「共



図1 「梅に鶯が鳴く絵」の検索結果の一例(法政大学藤田悟教授他)。写真は『光琳画式』(神戸大学附属図書館所蔵)の一部。出典: 国書データベース, <https://doi.org/10.20730/100345732>



同研究」として「大規模言語モデル等を利用した近代文芸テキストデータ解析法の探究」、「NW事業発展型研究」として「日本の古典文化を融合したマルチモーダル基盤モデルのためのデータインフラストラクチャの構築」や「日本の人名データベース」(JDBD)に関する研究の国際的展開などを実施している。二〇二五年度には新たに「重点課題」としてテキストの基盤構築や活用に関連した公募による共同研究も予定している。

また、プロジェクトではデータ駆動型研究の新たな取組としてマテリアル分析を一つの柱としており、古典籍等の試料を非破壊で分析できる光学機器等を備えた「マテリアル分析共同利用実験室」の開設準備を進めている。現有の高精細デジタルマイクロスコープ等に加え、新たに微小部蛍光X線分析装置(図2)を導入し、利用規則等を整備して、共同利用に供する予定である。当初は主として共同研究による利用によって運用経験を蓄積し、その後共同研究以外にも拡大してゆく計画である。

センターの今後の活動にご期待いただくとともに、関係各位のご協力をお願いする。



図2 導入予定の微小部蛍光X線分析装置XGT-9000SL。  
写真提供: 株式会社堀場製作所



# こんな古典籍があった！ ―国書データベース典籍画像紹介― 第一回

一〇年に及ぶ国文研DDHプロジェクトでは、当館に新たに設置された基盤データセンターが、歴史的典籍NW事業で作成された三〇万点の古典籍画像に加え、一五万点の画像を作成し、国書DBから公開していきます。ミッションの一つに、画像からのテキスト化(AI活用等)もあり、その進捗管理も同センターが担っています。この「ふみ」の誌面では、そうした取組を紹介していきますが、歴史的典籍NW事業時の「ふみ」で好評を博した、各地の所蔵機関によるおすすめeの古典籍紹介「こんな古典籍があった！」も引き続き掲載したいと思います。DDHプロジェクトで新たな誌面となった今回は、当館の資料を紹介いたします。

## ●国文学研究資料館所蔵

『声色早合点』三編三冊(合綴一冊)

URL : <https://doi.org/10.20730/200025437>



「声色」というのは、歌舞伎役者の声や口調を真似る芸能の一種で、宴席や寄席、芝居の木戸(入口)の、木戸芸者による呼び込みなどでも聴かせていました。本書は、歌舞伎の台詞と組み合わせ、当時の歌舞伎役者の、いわゆる大首似顔絵を配置する「絵入せりふ集」の一種です。「早合点」は、中途半端に、理解したつもりになることを言いますが、この場合、安直に理解できるハウツー物といった意味で、江戸時代にはいろんな分野でこの「早合点」を書名とした書冊が刊行されました。本書の初・第三編の著者である五柳亭徳升には、ほかに『口上茶番早合点』などの作があります。

『声色早合点』初編に、当時の素人声色師が描かれ、いかに声色を楽しむ需要があったかを窺い知ることができます。掲出の画面は、七代目市川団十郎による「菅原伝授手習鑑」の松王丸。台詞がウラに記されますが、いったい声色を紙面に記すとはどういうことで

しょうか。団十郎の絵に「言語すずしく惣じて鼻にかかる口ぜきにてわらひはうちへ引く」とあり、これを見て、ウラの台詞を真似るといのが本書の楽しみ方であったのかもしれない。



※画像の転載や翻刻掲載などを希望される場合は、利用条件のページ (<https://kokusho.nijl.ac.jp/page/usage.html>) を必ずご確認ください。

(該当部分を見る：  
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/200025437/6>)



# 国文研DDHプロジェクトキックオフシンポジウム見聞録

神戸大学大学院人文科学研究科准教授

有澤 知世

## はじめに

二〇二四年十二月一日(日)、シンポジウム「AI×人文学——データ駆動による未来形成——」が一橋大学一橋講堂において開催されました。国文研がこれまで推進してきた「歴史的典籍ネットワーク事業」(二〇一四～二三年度)の後継プロジェクトとして、二〇二四年度より始まった「データ駆動による課題解決型人文学の創成」(以下、国文研DDHプロジェクト)のキックオフイベントとして企画されたこの催しでは、国内外・異分野の研究者による、さまざまな課題意識に基づくパネルディスカッションを通じて、本プロジェクトが目指すことや異分野との協働によりどのようなことが可能になるのか、そして、新しい研究の在り方の課題等について活発な議論が行われました。

また、シンポジウム会場では国文研DDHプロジェクトに関する十七件のポスターセッションおよび五件のブース展示が行われ、多様な研究テーマや異分野融合の在り方について具体的に学ぶことができました。

## パネルディスカッションの様様

「DDH」とは「Data-Driven Humanities」の略で、「DH(人文情報学)」とは異なり、大量のデータを「駆動(Drive)」することによって新たな問いや気づきを導くことを目指しています。パネルディ

スカッションでは、六名の登壇者(専門分野はそれぞれ国文学・情報学・人文情報学)による講演の後、登壇者全員での議論が行われました。

渡部泰明氏の「AIは人文学の夢を見るか」では、古典籍のテキストデータ化やTEI化により、誰でも好きな時に古典知にアクセスしたり、様々な立場の人が教え合ったりできるような環境を作りたいという大きな展望が語られた上で、古典を完成品ではなく、時代に応じて様々な姿を見せる「知の可動態」と捉えらる、そのダイナミックな動態を理解するためにAIが有効な分析手段となり得るという期待が示されました。

近藤泰弘氏の「AIによる日本古典文学研究の方法」では、生成AIの仕組みについてわかりやすく解説を行った上で、近藤氏自身の実践例から、AIにより単語や文の意味を取出し数値化することが可能になったことで、『古今集』全体を分析しどのような題材が重視されているのかを数値的に導き出せること、また、その分析方法が他の作品にも応用可能であることが示され、具体的な異分野融合研究像が語られました。

日比谷潤子氏「AI×人文学：これからの言語データ整備に向けて」では、各研究分野から日本学術会議に提案され、テーマ別に十九のグランドビジョンにまとめられた「未来の学術振興構想」のうち、本プロジェクトは、今後の学術界の再構築への積極的貢献が



期待されるグランドビジョン10「データ基盤と利活用による学術界の再構築」に位置付けられていることが示され、各提案には連携の可能性があるものも多いため、同じグランドビジョン内で互いに目配りを行い、協力して欲しいという提言がなされました。

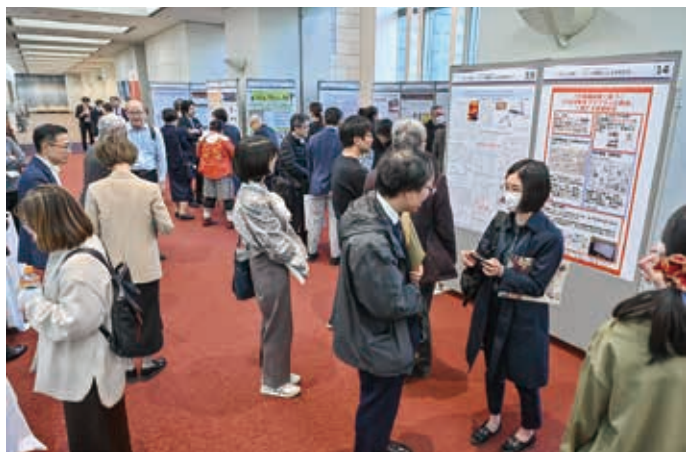
M・キンスキー氏「欧州におけるDHの現状と展望 ドイツを中心に」では、ヨーロッパにおけるDHの実践例としてハイデルベルク大学のデジタル文学地図プロジェクト等をあげ、一定の成果があることを示した上で、ヨーロッパ圏が日本語文献を対象とした研究を行うには厳しい環境であること、若い研究者の協力が不可欠である一方、評価軸が定まっていなかったり、新たなロールモデルが不足しているために、人材育成が困難であるという鋭い指摘がなされました。

吉見俊哉氏「自己との対話：私はもうすぐ消えるのだろうか？」は、吉見氏自身の業績等を学習した「A I 吉見」と吉見氏自身とが対話するデモンストレーションを行うことで、社会・歴史を連続的に捉えるA Iと、それらが実際にはそうではないと捉えている人間の差異を示し、継続的な思考実験の必要性を鮮やかに示しました。

喜連川優氏「悠久の人文学と1st Yearのデジタルは仲良しカットプル？」では、国文研はコンテンツ準備、妥当性解釈など、情報・システム研究機構はコンテンツのデータベース化、国立情報学研究所はILM（大規模言語モデル）との融合・実行環境の提供のように役割分担を行い、互いの得意分野によって不得意分野を補完し合いながら、トライアンドエラーをスピーディーに繰り返すことが重要であると提言されました。

## おわりにかえて

本催しでは、A Iと人文学の融合によって可能になる事柄が示され、明るい展望が語られた一方で、人材育成の難しさや、生成A Iを小さな研究コミュニティの中で継続的に開発することの難しさ、スピード感の異なる研究分野が如何に協働し得るのかといった、具体的な問題点が指摘されたことにも意義がありました。国文研DDHプロジェクトの推進にあたり、国文研が、新たな実践例を長期的に紹介したり、異分野の研究者同士が対話を行う場を設けるといったハブの役割を継続的に果たすことで、これらの困難を乗り越える基盤作りを行っていただきたいと思います。



## 第二十六回図書館総合展

二〇二四年十一月五日(火)～七日(木)、パシフィコ横浜で行われた第

二十六回図書館総合展のポスターセッションに参加し、国文研D D Hプロジェクトの概要や、国書データベースで公開している画像の活用を中心にプレゼンテーションを行いました。当館所蔵の古典籍画像はパブリックドメインで公開しているため、商用・非商用や改変の有無、利用目的を問わず、資料掲載等のデータ活用を自由に行えることを紹介し、参加者からは「画像を利用してみたい」という声を多くいただきました。  
<https://www.libraryfair.jp/poster/2024/237>



## D Hデータ構築検討会「著作権保護対象資料を活用したオープンデータ化の道筋を拓く」

二〇二四年十二月十九日(木)、当館大会議室及びオンラインにて開催し、七十五名(対面二十七名、オンライン四十八名)の方にご参加いただきました。

著作権保護資料を活用したオープンデータ化の方法を探るため、北本朝展氏(ROISDS 人文学オープンデータ共同利用センター/国立情報学研究所教授)から事例報告を、数藤雅彦氏(五常総合法律事務所弁護士)から法的課題について講演いただきました。

実例と法的視点を学び、参加者の連携を促進し、今後のD H推進の基盤を築くことができました。  
<https://lab.nijl.ac.jp/humanitiessthrough>  
[ddps/2024/11/06/dhkentokai2024/](https://ddps/2024/11/06/dhkentokai2024/)

社会との連携によるデジタル・ヒューマン・サービス(DH)の推進研究等補助事業  
**DHデータ構築検討会**  
 著作権保護対象資料を活用した  
 オープンデータ化の道筋を拓く

2024年12/19(木) 13:30～16:30  
 (現地参加は13:00以降)  
 国文学研究資料館 大会議室  
 (ハイブリッド開催)

参加申込 <https://lab.nijl.ac.jp/humanitiessthrough>

プログラム

13:30～14:00 開会あいさつ	主催者挨拶 国文学研究資料館長 佐々木 浩一
14:00～14:30 著作権のある資料とオープン・アクセス戦略	基調講演 ROISDS 人文学オープンデータ共同利用センター 北本朝展氏
14:30～15:00 人文学オープンデータ化における法的課題	基調講演 五常総合法律事務所 数藤雅彦氏
15:00～16:00 参加アンケート結果の発表およびディスカッション	自由参加 国文学研究資料館 研究開発部 佐々木 浩一

国文学研究資料館



ふみ 第22号は、  
 令和7(2025)年  
 6月発行予定です。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の『方丈記』(本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本)を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所(現IHI)創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」(活版印刷見本帳)を利用しています。

# ふみ

「データ駆動による課題解決  
 型人文学の創成」データ基盤  
 の構築・活用による次世代  
 型人文学研究の開拓」  
 (国文研D D Hプロジェクト)  
 ニューズレター第21号

〈発行日〉  
 2025年3月21日  
 〈編集・発行〉  
 国文学研究資料館  
 プロジェクト推進室  
 〒190-0014  
 東京都立川市緑町10-3  
 電話 050-5533-2910  
<https://www.nijl.ac.jp/>